

第26回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

功労賞受賞者

<氏名> 寒川 恒夫（そうがわ つねお）

<所属等> 静岡産業大学特任教授

<生年> 1947年（76歳）※年齢は、2024年3月18日時点

<学歴> 1981年 筑波大学大学院体育科学研究科博士課程修了

<学位> 学術博士（筑波大学）

<職歴> 1985年～2018年 早稲田大学教育学部専任講師、教授
（1987年～ 早稲田大学人間科学部）
2018年～ 早稲田大学スポーツ科学学術院名誉教授

<その他役職>

元 日本体育協会国民スポーツ専門委員会委員

元 文部科学省 ナショナルトレーニングセンターの在り方に関する調査
研究協力者

元 日本体育協会国際交流専門委員会委員

元 文部科学省 中学校学習指導要領（保健体育）の改善に関する調査協力者

元 日本スポーツ人類学会会長

アジアスポーツ人類学会会長

寒川恒夫氏は、国際的にトップを決める「国際（近代）スポーツ」に係る研究が多数行われる潮流の中で、永年にわたり民族や身体、遊び、武道、舞踊といった幅広い視点からスポーツを捉え、日本国内でスポーツ人類学という研究領域を開拓し定着させた。これはスポーツの多様な在り方を明らかにするものであり、現代社会のスポーツの在り方を考える上でも重要な研究であるといえる。

スポーツ人類学は、人類学とスポーツ科学を親科学としている。そのうち人類学は、生物の進化、適応等の側面から研究する自然人類学、遺物や遺跡によって人類の過去を研究する考古学、音声による人間相互の情報伝達を扱う言語学、世界の諸民族に見られる文化や社会について比較研究する文化人類学、庶民の伝承的な生活文化を対象とした民俗学等の分野から構成されている。同氏は、これらの視点から総合的にスポーツにアプローチをし続けてきたのである。

特に文化人類学では、フィールド・ワーク（実地調査）が重要とされる。フィールド・ワークは、事前に調査や観察の基本的な知識を修得し、該当論文を読み、理論モデルの討議、役割分担を行って臨む。現地では、原住民に恐怖等を抱かせないよう本当の信頼関係を構築するとともに、予期せぬ出来事に対しては、臨機応変に軌道修正を行う。そして、資料収集の後に成果報告となる幅の広い活動である。

日本のスポーツ人類学が試行錯誤の段階にあった 1970 年代、同氏はフィールド・ワークを精力的に行い、修士論文「自然民族の儀礼球戯の研究（1973 年）」、博士論文「稲作民伝承遊戯の文化史的考察（1981 年）」を完成させて、スポーツ人類学研究の質の向上に貢献した。

さらに、1988 年には、K. ブランチャードと A. チェスカ著の「The Anthropology of Sport」を翻訳し、「スポーツ人類学入門（大林太良監訳）」の発行に尽力した。同書はスポーツ人類学の発展過程における初めての入門書とされ、スポーツの本質的な理解を得るための貴重な書となっている。

その後も同氏のフィールド・ワークは継続し、「ムラと遊び」、「闘鶏と中国文化」、「遊牧民運動会観戦の記」、「ラオス・ベトナムにおける民族スポーツ調査報告」、「世界武術紀行」など数多くの成果報告をまとめ、日本体育学会（現 日本体育・スポーツ・健康学会）等で発表することで他の研究者に対しても多様なスポーツとの関りを示し、併せて同成果を活かして今日まで数多くの後進を育成している。

その他、ナショナルトレーニングセンターの在り方に関する調査研究協力者（文部科学省）、中学校学習指導要領（保健体育）の改善に関する調査協力者（文部科学省）、日本スポーツ人類学会会長、アジアスポーツ人類学会会長を務めるとともに、日本スポーツ協会（当時、日本体育協会）においては国民スポーツ専門委員会委員、国際交流専門委員会委員を長年にわたり務めるなど学会活動、社会活動にも積極的に取組んだ。

同氏は、日本においてスポーツ人類学という研究領域を確立し、多様なスポーツの捉え方を提示することでスポーツの普及・発展に大きく貢献した。